

## *A Thesaurus of Old English*は初期中英語に有用か？ - The 'Katherine Group' に現れた Word Pairs の観点から -<sup>1</sup>

The Usability of *A Thesaurus of Old English* for Early Middle English  
with Special Reference to Word Pairs in the 'Katherine Group' Lives.

谷 明 信\*  
Akinobu TANI

This study has assessed and ascertained the usefulness of *A Thesaurus of Old English* (henceforth *TOE*) for Early Middle English studies, extending its use beyond Old English to Early Middle English. *TOE*, intended for use in Old English studies, is as yet the only lexical resource of its kind available to the students of Middle English, that is, until *A Thesaurus of Middle English* (henceforth *TME*) is published in a few years time.

Components of synonymous word pairs like *have and hold* can provide important clues to the usefulness of *TOE* for Early ME studies. To ascertain its usefulness, a special emphasis was placed on such synonymous word pairs found in the saints lives of the 'Katherine Group' (henceforth KGL), i.e. *St. Katherine*, *St. Marherete* and *St. Iuliene* in MS Bodley 34. KGL has been chosen as suitable for this purpose because this group of works, written around 1200, is known to abound in alliteration and word pairs.

First, I looked at the treatment of word pairs in *TOE* in comparison with Clark Hall, one of *TOE*'s source dictionaries. Second, the components of all the word pairs in KGL were put to etymological analysis based on the information of *OED2*. Next, I chose a number of KGL synonymous word pairs in three semantic fields and looked up all the component words in *TOE* to see if these ME component words were arranged and placed in the same semantic fields of *TOE*.

For all the semantic changes and the lexical replacement which occurred as Old English became Early Middle English, this study has confirmed that *TOE* is a useful and perhaps even an essential lexical tool for Early Middle English studies (at least until *TME* is available).

キーワード：古英語シソーラス ワードペア キャサリン・グループ 初期中英語

Key words: *A Thesaurus of Old English*, Word Pairs, The 'Katherine Group', Early Middle English

### 1. 1 研究の目的

*A Thesaurus of Old English* (以下*TOE*) は、1995年の出版以来、中世英語の唯一の類義語辞典として、好意的に受け入れられてきた。そのタイトルから明らかなように、この類義語辞典は古英語での使用を意図されたものであるが、*A Thesaurus of Middle English*と*Historical Thesaurus of English*が未刊行である現在、*TOE*が初期中英語に有用であるのかを検証するのが本研究の目的である。そのために、本研究では、キャサリンググループ(The 'Katherine Group') に現れたワードペア (word pairs) に着目し、その構成要素を手がかりとして、*TOE*の初期中英語での有効性を検証する。同時に、これらのワードペアという観点から*TOE*を検討することで、*TOE*の類義語辞典としての問題点についても検討を加える。

### 1. 2 本研究のコーパスとその特徴

本研究の対象は、初期中英語 (Early Middle English) のいわゆる「キャサリンググループ」 (The 'Katherine

Group') で、その中でも特に聖女伝である*St. Katherine* (以下*SK*)、*St. Marherete* (以下*SM*)、*St. Iuliene* (以下*SJ*)、すなわち総称して*Katherine Group Lives* (以下*KGL*) と呼ばれる作品群で、テキストはMS Bodley 34の校訂版を用いる。

このキャサリンググループは英語散文の連続性の議論でしばしば言及される重要な作品群で、*Ancrene Wisse*や*Wooing Group*との親近性が指摘されている。作成年代は1190年から1230年の間で、方言はWest MidlandのHerefordshireとされている。キャサリンググループはいわゆる頭韻散文であり、1) two-stress phraseを基本単位としている書かれており、2) 頭韻を多用している点から、古英語のAelfricやWulfstanとの類似性も指摘されている。しかし、Millett (1988: p.26) は、キャサリンググループでは古英語のAelfricと異なり、あるtwo-stress phraseがその前または後ろの別のtwo-stress phraseと、あるいは前後両方のと、頭韻により結合される例が少なく、逆に、一つのtwo-stress phrase内でのinternal alliterationが多い

\*兵庫教育大学第2部 (言語系教育講座)

ことを統計的に指摘している。ワードペアのほとんどはこのようなtwo-stress phraseに分類される。

そして、Bennett (1986: pp.290-91) が指摘するように、キャサリンググループでは頭韻ワードペアが頻出する。これが、本研究で、KGLのワードペアを調査する大きな理由である。

## 2. KGLのWord Pairs概観

### 2. 1 Word Pairsとは何か?

ワードペア (word pairs) とは、“and” や “or” などの接続詞により結合された、同一の統語位置を占める2語で、別名バイノミアル (binomials) やダブルレット (doublets) と称されることもある。このワードペアには、音韻的な特徴から、現代英語の *time and tide* のように頭韻を踏む例や、*wear and tear* のように脚韻を踏む例、また、*body and soul* のように韻を踏まない例がある。

これらのワードペアに関しては多くの先行研究があり、その中でも、古英語・初期中英語の散文作品を対象とした特に重要なものとして Koskenniemi (1968) がある<sup>2</sup>。

Koskenniemi (p.11-12) が対象とするのは、

#### 1) 2語から成る通常のワードペア:

and sona aras burh eall hal and gesund (The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History, pp.178-9)

#### 2) 3語以上から構成されるワードペア:

her syndan ryperas & reaferas & woroldstruderas (Sermon Lupi ad Anglos, l.171)

#### 3) 一語とその同義的な句から成るワードペアである:

wið al þet ich i world hah & i wald habbe (Marg. 10.13)

しかし、本研究では、TOEという古英語類義語辞典の初期中英語での有用度を確認するのが目的であるので、この3種のワードペアのうち、1) の様に2語からなる通常のワードペアのみを対象とする。

Koskenniemi (p.90) によれば、ワードペアの構成要素間の意味関係には①~④のような関係がある:

① nearly-synonymous: *famen & feondes*

② associated by contiguity of meaning: *ege & cwacung*

③ complementary or antonymous:

*mid mete & mid mannum; ge word ge weorc*

④ enumerative: *were, wif & wenchel*

このうち、①の類似的な意味と②の意味の隣接による結びつきという意味関係のワードペアは、同義語・類義語辞典であるTOEを検証する際に、非常に有効な手がかりを提供するものである。従って、本研究では、主に、これらの①②の意味関係のワードペアを対象とする。KGLからのこれらの意味関係のワードペアの例を挙げると:

#### ① 類義語のワードペア

bis me were [wilre], 3ef þu wel waldest, to habben ant to halden þe cwic þen to acwelle þe. (“to have and hold”) (SK681)

#### ② 意味の隣接によるワードペア

ah ba ha wes offearet of scheome ant of sunne (“by shame and by sin”) (SK 32)

### 2. 2 KGLのWord Pairsの語源的構成

OED2の語源情報を頼りに、KGLに生じたワードペア564例の構成要素1128語を、その語源により分類した。その結果、中英語期に入ってから語形成により生産された新語も若干あったが、古英語からの語が981語と圧倒的多数で全体の86.97%を占め、一方、古フランス語からの借用語は22語で全体の1.95%にしかすぎなかった:

#### ① 「古英語+古英語」:

Godes sune . . . schal eft o domesdei cumen ba demen þe cwike ant te deade? (SK 123)

#### ② 「古フランス語+古英語」:

Hwa-se on mi nome makeð chapele oðer chirche (SM 46/32)

イディオム的な要素に古風な語が残るという傾向を考慮する必要は当然あるものの、KGLのワードペアの場合、上記のように圧倒的多数が古英語から存在した単語から構成されていると言う事から、TOEは初期中英語、あるいは少なくとも、KGLの研究には非常に有用であると考えられる。加えて、中英語期の新語 (全体の7.09%) は、古英語からの本来語要素を基に、中英語期に語形成により生産された新語であるので、それらの語の要素の一部をTOEで見つけることが多くの場合可能である (セクション4.1の *nebschaft* の例を参照のこと)。従って、KGLのワードペアの90%強の構成要素の語については、TOEで何らかの形で確認できるのである。すなわち、TOEの初期中英語での有用度はより一層増すことになる。

### 2. 3 KGLのWord Pairsの特徴

#### 2. 3. 1 KGLのword pairsは説明的か?

同義的なワードペアの使用に関しては、理解の困難な借用語を説明するために使用されたと論じる学者もいるので (Koskenniemi: pp.13-17)、古フランス語からの借用語を含むワードペアを検討した。本研究の全データの1.95%を占める古フランス語からの借用語を含むワードペアは20例ある:

Drihtin, do me merci & milce of þis dede; (SM 52/2)  
(古フランス語+古英語)

hire flesliche feder Theodosie hehte, of þet heþene folc patriarce & prince.

(SM 4/17) (古フランス語+古フランス語)

これらのワードペアの構成要素の語順は、「古フランス語+古英語・中英語」の用例が9例で、一方「古英語+古フランス語」・「古フランス語+古フランス語」などの用例が11例である。ワードペアが説明的であるためには、「古フランス語+古英語」の語順が一番効果的であるはずである。また、これら古フランス語を含む20例のうち、一例を除き、上記の例のように、全て頭韻を踏んでいる<sup>3</sup>。これらの事実と、古フランス語の借用語を含むワードペア自体が少数であることを考慮すると、ワードペアが一方の構成要素の説明のために用いられるという主張は、KGLには当てはまらなると考えられる。

### 2. 3. 2 KGLのword pairsの品詞

次に、KGLのワードペアの品詞を調査した。圧倒的に多かったのは、動詞257例(45.6%)と名詞211例(37.4%)であった。動詞のワードペアが多いのはKGLの特徴であると言えよう<sup>4</sup>。ちなみに、現代英語のワードペアの品詞の場合、Gustaffson(1975)によれば、名詞が57%で一番多く、次いで動詞が20%である。

## 3. TOEでのWord Pairsの扱い方の問題点

### 3. 1 TOEのCASDへの依存

このセクションでは、TOE、及びTOEの基本資料となった*A Concise Anglo-Saxon Dictionary*(1960)(以下CASD)との比較を通して、TOEでのワードペアの取り扱いを検討する<sup>5</sup>。

TOE Indexを手作業で検索した結果、27例のワードペアが収録されている事がわかった。さらに、CASDに現れたワードペアを検索した結果、21例が収録されていた<sup>6</sup>。この2つの辞典に収録されたワードペアを比較すると、TOEの27例中11例がCASDと重複していた：

- ①æc and sit, ②æc oþþe sib, ③æt and wæt,
- ④an and an, ⑤dægcs and nihtcs, ⑥hider and bider,
- ⑦lytlum and lytlum, ⑧near and near,
- ⑨oft and gelome,
- ⑩widan and sidan, ⑪wide and side

この事から、ワードペアの収録についてもTOEはかなりの程度CASDに依拠していると言えよう。

### 3. 2 CASDがTOEに与えた影響

このようなTOEのCASDへの依存は、CASDでのワードペアの扱いの問題点をそのまま引き継いでいることを意味する。その一つは、収録されているワードペアの選択が恣意的なことである。この問題を考察するために、TOEに収録されている2つのワードペアæt and wæt(「食べ物と飲み物」)とsæc and eorþe(「海と大地=地球の表面全体」)、及び関連するワードペアの用例を、DOE Corpusで検索した。

まず、CASD及びTOEともに収録されているæt and wætはDOE Corpusでは3例見つかった。一方、同義的で現代英語にも残っているがTOEに収録されていないmete and drincは9例であった。また、TOEに収録されているsæc and eorþeは5例見つかったが、一方、類義的なheofon and eorþeは157例の用例が見られる。それにもかかわらず、TOEには収録されていない。しかも、このheofon and eorþeは、TOEの分類項目“01 Physical World”の最上位概念の“Universe”というような項目にでも収録されるべき、非常に重要なものであるにも関わらずである<sup>7</sup>。

このようなTOEに収録されているワードペアの恣意性は、CASDの特性を十分に考慮せずに利用した事に原因があると考えられる。CASDはその名が示す通り、「簡約」辞典であり、スペースの関係から意味解説が一義的な目的であると考えられる。従って、現代英語から類推できるワードペアやイディオムを収録しないのは当然であると言えよう。しかしながら、TOEの目的は、自ずからCASDと異なるはずであり、CASDに収録されていなくても重要なワードペアに関しては補充すべきであると考えられる。

さらに、収録されたワードペアの品詞と意味分野に関しても、CASDはTOEに影響を与えている。まず、品詞については、TOEのワードペア27例のうち19例は副詞的で、動詞に至ってはhabban and healdanしか収録されていない。しかし、セクション2.3.2で見たように、KGLのワードペアの場合、動詞の例が最多であり、名詞の例も多いのである。

また、ワードペアの意味分野に関しても、品詞との関係から、TOEの意味分類5の「存在」の分類中の「空間」や「時間」に関係するワードペアがほとんどである。

このような問題を含みながらも、TOEに含まれているワードペアが同義的ではなく、反意的または補完的なワードペアである事は、評価される点ではある(feorr and neahやsæc and eorþe)。なぜなら、そのようなワードペアの意味は多くの場合、non-compositionalで両極端の概念に言及することで、しばしば全体を包括するような意味を持つからである。また、同義的なワードペアについては、同一項目に含まれてさえいれば、どのようなワードペアが潜在的にありえるのかは容易に推測できるからである。しかし、やはり、1)ワードペアの選択が恣意的である点や、2)品詞・意味分野に偏りがある点に関しては、改善が望まれる。

## 4. 事例研究

ここでは、KGLに生起するいくつかのワードペアの構成要素が、TOEでどの項目に配当されているのかを調査する。それにより、TOEの初期中英語への適用の可能性を探るとともに、TOEの問題点も検討する。ここで検討

するのは、1) 「見目・姿」、2) 「美しい・綺麗な」、3) 「誉める、崇める」と言う3つの意味グループのワードペアである。

#### 4. 1 「見目・姿」のワードペア

「見目・姿」の意味で、KGLで見られたワードペアは次の2種類である<sup>8</sup>：

①I þis burh wes wuniende a meiden swiðe 3ung of 3eres (twa wone of twenti), feier ant freolich o wlite ant o westume (SK 24)

②O schene nebschaft ant schape se swiðe semlich . . . (SK 530)

すなわち、その構成要素は、near-synonymousともcomplementaryな意義を持つとも取れる①の *wlite* と *westume* 及び②の *nebschaft* と *schape* である。これら「見目・姿」の意の語は、TOEでは次のような項目に収録されている：

1) *wlite*: 02.05.09.07 Form, appearance: andwlita, bleo, hiw, sceawung, wlite

2) *wlita*: 02.04.03.01.03 Face: andwlita, ansien, hleor, mut, neb (b), nebwlite, wlita

3) *wæstm*:

02.01.03 Fruitfulness, fertility;

02.01.03.03.04 Offspring, race, breed, family, children;

02.04.02.03 Height, stature or form;

02.07.01.01 Fruit of the earth;

03.03.04.03 Growth, increase;

04.02.04.03.02 Crops/crops;

05.03.02 Event, issue, result;

11.07.03 Use, advantage, profit;

15.04.01 Lending of money

4) *sceap*:

02 Creation . . . .

05.10.06 Form, shape: andwlita, ansien, bleo, gefegednes, hiw, hiwung, (ge)licnes, limræden, mægwlite, on (ge)licnes, gesceap . . . See 02.05.09.07 Appearance; 03.04 Form, kind (下線著者)

まず、*wlite* とその変異形の *wlita* は別々の項目に分類されている：*wlite* はTOEの“02.05.09.07 Form, appearance, aspect”の項に、一方、変異形の *wlita* はTOEの“02.04.03.01.03 Face”の項に収録されている。後者の項には、議論中の *wlite* 及び *nebschaft* の構成要素である *neb* が収録されている<sup>9</sup>。また、*sceap* は“05.10.06 Form, shape”の項に配当されている。これらのワードペアの構成要素のTOEでの扱いから、次の問題が見て取れる：

1) “02.05.09.07 Form, appearance”と重複する“05.10.06 Form, shape”という項があること、

2) “05.10.06”の参照項目から、“02.05.09.07 Appearance”と“03.04 Form, kind”という同義の項目が2つもあることがわかる。

すなわち、「見目・姿」に関連する項目がTOEには4つも存在しているのである。意義分類の困難さを考慮しても、このような重複項目は何らかの方法で整理されるべきである。

さらに、ワードペアの構成要素の一つである *wæstm* は、「見目・姿」の意味では収録されていない。しかしながら、TOEの資料の一つであるCASDの *wæstm* の項では、次のように「見目・姿」の意味が収録されているのである：

**wæstm** (e) mn. (nap. wæst-mas, wæstme) growth, increase : plant, produce, offspring, fruit, Bo, BL, G; Æ, CP : result, benefit, product : interest, usury : abundance : stature, form, figure (CASDより：下線著者)

さらに、Bosworth-Tollerの *wæstm* の“III. growth, condition reached by growing, form”の項には、SMやSKからの引用があり、特に次のSKからの引用例では、

Hire wliþi westum vultus ipsius claritas, Kath. 310 (下線著者)

*westum* に対応するラテン語 *vultus* (= “the face; the face, look, appearance”) から、「見目・姿」の意味があることは明らかである。

#### 4. 2 「美しい・綺麗な」のワードペア

次に、「見目・姿」に関係する美しさを表す形容詞の同義的なワードペアに検討を加える。KGLでは次のような例が見られた<sup>10</sup>：

①a meiden swiðe 3ung of 3eres (twa wone of twenti) , feier ant freolich o wlite ant o westume (SK 24)

②mi crune schal beon brihttre ba & fehere (SJ 177)

③Constu bulden a bur[h] inwið [i] þin heorte, al abute bitrumet wið a deore[w]urðe wal, schininde ant schen[e], of 3imstanes steapre þen is ei steorre? (SK 603-4)

これらの構成要素 *feier*, *freolich*, *briht*, *fehere*, *schininde*, *schene* は、TOE Indexにより調べると、次のような項目にそれぞれ配当されていた：

1) *faeger*: 07.10 Beauty, fairness

2) *freolich*: 07.02.04.03 など

3) *beorht*: 03.01.12 Brightness, light

4) *scinan*: 07.10 Beauty, fairness

5) *sciene*: 07.10 Beauty, fairness

すなわち、*feier*, *freolich*, *briht*, *schininde*, *schene* の5語のうち、*feier* と *schininde* の基本形である *scinan* と、*sciene* の3つは、“07.10 Beauty, fairness”という同一の項目に正

しく配当・分類され、次のように収録されている：

07.10 Beauty, fairness: . . .

.Lovely, beautiful, fair: gebleod, cyme<sup>o</sup>, cymelic<sup>o</sup>,  
fæger, hiwbeorht<sup>o</sup>, hiwlic, hleortorht<sup>o</sup>,  
sciene, wlitebeorht<sup>o</sup>, wlitiful<sup>o</sup>, wlitescine,  
 wlitig . . .

.To be splendid, shine: scinan

しかし、先の①-③のワードペアの構成要素の一つである *beorht*、すなわち現代英語の *bright* は、“03.01.12 Brightness, light” の項目に分類されており、美しさの概念を表す項には収録されていない。「輝くばかりに美しい」という *scinan* が “07.10 Beauty, fairness” に分類されていること、及び、*CASD* の定義にも “beautiful” という定義があることを考えると、この点は問題があろう。さらに、*freolich* についても、*TOE Index* では “07.02.04.03 Nobleness, excellence, nobility, magnificence” などの分類項目に入れられており、美しさの項目には入っていない。しかし、*TOE* の資料となった *CASD* の定義には、*freolich* にも “beautiful” という意義が挙げられていることを考えると、*beorht* と同様、*freolich* も *TOE* の “07.10 Beauty, fairness” の項へ配当されるべきであろう。

#### 4. 3 「誉める・崇める」のワードペア

次に、キャサリンググループなどの宗教散文で非常に重要な表現で、Schaefer (1996) も扱っている「誉める・崇める」という意味のワードペアを検討する。KGLでは、次の4種のワードペアが見られた：

① *hersumin ant herien* (SK 128)

② *heien & herien* (SJ 534)

Iblescet beo þu eaure. þe ah eauer euch þing heien & herien (SJ 616)

③ *luest . . . & heiest* (SM 42/8-9)

④ *hersumeð ant wurðgið* (SK 98)

これらのワードペアの構成要素について、*TOE Index* での扱いを示したのが表1である。

これを見れば明らかなように、*hean*、*herian*、*lofian* と *weordian* に関しては、全て “16.02.04. Worship, honour, praise” の項目に分類されており、*TOE* が初期中英語にも有用であるという事が確認できる。ちなみに単純なミスであるが、*hean* に関して *TOE Index* ではこの項への指示がない。

*hiersumian* に関しては、*OED2* も *MED* とも “to revere” 「崇める」という意味を記載している。しかし、この語は、*hieran* からの派生語であり、そこまで意味を拡大して解釈しても良いのかという問題がある。実際、Bosworth-Tollerの *hysumian* の項は “To be obedient, obey, serve” という定義を挙げており、*CASD* も同様に、  
 +*hiersumian* (ea, i, y) w. d. to obey, serve, BH, Mt;

表1. 「誉める・崇める」のワードペアの構成要素の *TOE* での配当

hean (high v.)	05.12.05.12.02 To raise, lift up, elevate ※Indexでは抜けているが、“16.02.04 Worship, honour, praise”の項に記載あり
herian (hery)	07.04.04 Praise, acclamation, applause 16.02.04 Worship, honour, praise
hiersumian (hearsum)	16.02.01 Faith
lofian (love v <sup>2</sup> .)	16.02.04 Worship, honour, praise
weorðian (worth v <sup>2</sup> .)	07.08.02 Honour, glory 15.02 Worth, value 16.02.04 Worship, honour, praise 16.02.04.03.03 Singing, church, singing 16.02.04.04.02 A feast-day, holy day

AO: (+) reduce, subject, conquer, CHR. [‘hearsum’] という定義で、「崇める」という意義は掲載されていない。この点、*TOE* の扱いは妥当ではなかろうか。

さて、*hean*、*herian*、*lofian* と *weordian* が収録されている *TOE* の項 “16.02.04 Worship, honour, praise” は、次のように記述されている：

16.02.04 Worship, honour, praise: . . .

.To praise, extol, glorify: *aherian*, *aræran*, (ge) *arweorbian*, *awuldrian*<sup>o</sup>, *awundrain*<sup>o</sup>, *began*, *begangan*, (ge) *beorhtnian*<sup>o</sup>, *gebiddan*, (ge) *bletsian*, (ge) *blissian* (be/for/ofe/on), *bodian*, (ge) *breman*, *deman*, *domian*<sup>o</sup>, (ge) *eadmed* (i) an, *gifian*, *healdan*, *hean*, *hebban*, (ge) *herian*, *lof beran*, *lof hebban*, (ge) *lofian*, *loflæcan*<sup>o</sup>, *lof reccan* and *raran*, *lof wyrcan*, (ge) *miclian*, *oferblissian*<sup>o</sup>, *tobædan*, *toweorbian*, (ge) *weorbian*, (ge) *widmars* (i) an, (ge) *wuldrian*, *gewundorlæcan*<sup>o</sup>, (ge) *wundrian*, *ymblofian*<sup>o</sup> (下線筆者)

このように収録語の多い項目では、どのような同義的なワードペアが潜在的に可能であったかという事を伺い知ることができる。例えば、今回のデータでは見られなかったが、*TOE* の “16.02.04 Worship, honour, praise” の項にある、現代英語の *heave* に相当する *hebban* が他の同義語と取るワードペアの可能性を探りたい場合、同じ項に掲載されている動詞を見ればある程度の検討がつく。頭韻を踏む例は、Oakden (1968) のリストでは確認できなかったが、次の *OED2* の動詞 *heave* の項にはワードペアに非常に類似した例が引用されている：

2. † b. To raise, exalt, lift up, elevate (in feeling, dignity, station, etc.) ; to extol. *Obs.* . . .  
 c1200 Trin. Coll. Hom. 213 He *hefieð* his lichame, and

heneð his soule. (下線著者)

この様な例を見ると、*hebban*が*hean*とワードペアを形成する可能性が見て取れる。

さらに、*TOE*は同義語の頭韻辞典としても使える可能性があるだろう。これは、従来と異なり、結果から見ていくのと違い、我々があたかも古英語や初期中英語の作者になったかの様に、頭韻を踏むためにどの語とどの語を使うのかという観点から、語を探し出す、或いは推測する事ができる。つまり、古英語の頭韻辞典としての使用が可能であることを意味する。

また、頭韻を踏むためによく使われた語とそうでない語という観点から、ある作品の作者のdictionを調査できる可能性もある。実際、今回のデータでは、*hean*と*hery*は、頭韻を踏む場合もそうでない場合もワードペアとして用いられる可能性が高かった。一方、それと同義的な語で、上記の*TOE*の“16.02.04 Worship, honour, praise”にも含まれている (*ge*)*blissian*は次のような例が見られるにも関わらず、

Iblescet beo þu eaure. þe ah eaure euch þing heien & herien (SJ 616) (下線著者)

KGLではワードペアを構成している例は見られなかった。

## 5. まとめ

本研究では、KGLのワードペアの構成要素を手がかりとして、1) *TOE*が初期中英語の研究に有用かどうか、2) *TOE*の類義語辞典としての問題点はないのか、を検証した。

その結果、次のような問題点が確認された：

- 1) *TOE*の資料である*CASD*に影響を受けている
  - a) 収録されているワードペアが恣意的である。
  - b) ワードペアの品詞・意味分野に偏りがある。
- 2) 「見目・姿」に関する語彙の場合、重複項目が4つあった。
- 3) *freolic*のような頻度が高いと思われる語の、「美しさ」の項目への配当が抜けている。

このような問題点は改善されるべきであろう。

このような問題点はあるものの、*TOE*は初期中英語にも有用であるということも確認された：

- 1) ワードペアの構成要素の語源の調査から、約90%強の構成要素は*TOE*において検索可能である。
- 2) 「誉める・崇める」の意味の初期中英語のワードペアの構成要素は、*TOE*の正しく同じ項目に配当されていた。
- 3) 「見目・姿」および「美しい」のワードペアの構成要素も、一部の問題はあるものの、概ね正しく*TOE*の項目に配当されていた。

すなわち、古英語から初期中英語に起こった意味変化・

語彙の代替などを考慮しても、*TOE*が今回の対象としたKGLのワードペアから見た限り、非常に役に立つことが確認された。

また、セクション4. 3で見たように、「誉める・崇める」のワードペアの構成要素の語が収録されている*TOE*の項目 (“16.02.04 Worship, honour, praise”)には、非常に多くの類義語が収録されている。このような点を鑑みると、類義・同義的な意味を持つ語の頭韻辞典としても利用も可能である。もちろん、語彙の廃用と他の語による代替や借用、意味変化などの研究への利用も考えられようが、それはどちらかという*Historical Thesaurus of English*で望むべき事で、*TOE*はむしろ、個別作品のdictionの研究といった文学的・フィロロジカルな研究への利用により有益であると考えられる。

最後に、初期中英語研究の場合、古英語との比較か、後期中英語との比較を意図するのかということにより大きく左右されるが、少なくとも古英語との比較を意図したり、キャサリンググループのように古英語との親近性が強い作品の場合、*TOE*は、*A Thesaurus of Middle English*が出版されるまでは、初期中英語研究にも非常に有用で、恐らく不可欠な道具であることは間違いない。

## 注

1. 本論文は、2000年12月10日に関西大学で開催された日本中世英語英文学会第16回全国大会のシンポジウムII「古英語類語辞典の中世英語研究への活用」での発表原稿を、修正・簡約化したものである。貴重なご助言を賜った大阪大学の渡辺秀樹先生と、*CASD*の個人電子版の利用などの便宜を図っていただいた関西外国語大学短期大学部の西村公正先生に、ここに記して感謝の念を表す。
2. ちなみに、Koskeniemi (1968) は本研究のコーパスの一つである*SM*の調査も行っている。また、キャサリンググループのワードペアを扱った研究として、*SJ* と *Hali Meidhad*の動詞のワードペアに関するShinoda (1991) と、口承性との関係からKGLのワードペアを扱ったSchaefer (1996) がある。しかし、本研究の目的とは直接関わらないので、言及するにとどめる。また、参考文献には、書誌的に有用であると考え、直接触れていない、特に日本の研究者のワードペアの研究を含めておいた。
3. ちなみに、古フランス語以外の要素からなるワードペアについても、構成要素が頭韻を踏んでいるかどうかを調査した。その結果、全体の483例、すなわち85.64%は頭韻を踏んでいた。また、頭韻を踏んでいない81例のうち67例は*cwicke & deade*の様に古英語と古英語の構成要素の組み合わせで、古くから存在していたワードペアであった。
4. このようなKGLでのワードペアの品詞の実態を鑑みる

と、Shinoda (1991) のSJとHali Meidhadの動詞のワードペアを扱った研究論文は非常に興味深い。

5. TOEのthe Indexでのセットフレーズとイディオムの扱いに関して、Watanabe (forthcoming) は、そのセクション6で触れて、その扱いに統一性が必要であると提言している。

6. CASDのワードペアに関しては、関西外国語大学短期大学の西村公正先生が個人的に作成されたCASDの電子版を検索する機会を与えていただいた。ここに記し、感謝の念を表す。

7. OED2では、*wet* n<sup>1</sup>. 及び *eat* n. の定義部分には *æt* and *wæt*の句は収録されず、引用例に含まれているだけであるのに対し、*meat* n. では定義部分で *meat and drink*の句は収録はされていないものの、“solid food, in contradiction to drink” (下線筆者) とあり、*meat and drink*という句の存在がより容易に想像できるようになっている。また、*sea and earth*も*heaven and earth*も定義の部分で、その句の存在が示されているものの、*heaven*の3 a.の項はこの*heaven and earth*のみの引用例が含まれており、*sea and earth*とは扱われ方が格段に違う。

8. ちなみに、Oakden (1968) によれば、*wlite and waestum* は*Blickling Homilies*にも用例がある。

9. この “02.04.03.01.03 Face” の項を見ると、他にも *hleor* や *neb* という語が見られるが、それらの語から成り立つワードペアは今回のデータで見られなかったが、個々の単語を含む、次のような例が見られた：

Eleusius iherde bis. & feng his neb to rudnin & tendrin ut of teone (SJ 235)

hire lufsume leor lilies ilicnesse & rudi ase ros (SJ 197) (下線著者)

10. このうち、①の*feier ant freolich*と同種のワードペアが、Bosworth-Tollerの*freolich*の項に、古英語からの引用で挙げられている。また、これらの美しさを表すワードペアと関連するが、ワードペアとは言えない例に、次のものがある：O schene nebschaft ant schape se swiðe semlich (SK 530) (下線著者)

#### 一次資料

d'Ardenne, S. R. T. ed. *þe Liflade ant te Passiun of Seinte Iulienne*. EETS o.s. 248. London: Oxford University Press, 1961.

d'Ardenne, S. R. T. and E. J. Dobson, eds. *Seinte Katerine*. EETS s.s. 7. London: Oxford University Press, 1981.

Mack, Frances M. ed. *Seinte Marherete: þe Meiden ant Martyr*. EETS. o.s. 193. London: Oxford University Press, 1934.

Roberts, Jane and Christian Kay with Lynne Grundy eds. *A Thesaurus of Old English: Vol. 1: Introduction and*

*Thesaurus; Vol. 2: Index*. London: King's College London, Centre for Late Antique and Medieval Studies, 1995.

#### 参考文献

Bennett, J. A. W. *Middle English Literature*. Oxford: Clarendon Press, 1986.

Bethrum, Dorothy. “The Connection of the Katherine Group with Old English Prose.” *Journal of English and Germanic Philology* 34 (1935), 553-564.

Bosworth, J. & T. N. Toller. *An Anglo-Saxon Dictionary*. Oxford: Clarendon Press. 1898-1921.

Chase, Thomas. *The English Religious Lexis*. Ontario (Canada): The Edwin Mellen Press, 1988.

Clark Hall, J. R. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. 4th ed. Suppl. by Herbert D. Meritt. Toronto; Buffalo: University of Toronto Press, 1960.

Görlach, Manfred. Review of *A Thesaurus of Old English*. *Anglia* 116 (1998), 398-401.

Gustafsson, Marita. *Binomial Expressions in Present-Day English: A Syntactic and Semantic Study*. Turku: Turun Yliopisto, 1975.

Imai, Mitsunori. “Merism in *Havelok the Dane*.” *Computer-Assisted Study of Early Modern English*. (Report of the International Scientific Research Program, University-to-University Cooperative Research, Project No. 08045004.) Ed. Imai, Mitsunori. NP: 1997.

Kikuchi, Kiyooki. “Aspects of Repetitive Word Pairs.” *Poetica* 43 (1995), 1-17.

Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.

Kuriyagawa, Fumio. “Eigoniokeru Dentoutekibuntaino Ichitokushoku [One Characteristic of the Traditional Style in English].” (in Japanese) *Kuriyagawa Fumio Zenchosakushuu Gekan* [Works of Kuriyagawa Fumio, Vol. II]. Tokyo: Kinseido. 1981. 771-777.

Leisi, Ernst. *Die tautologischen Wortpaare in Caxton "Eneydos"*. Zürich diss., Zürich; New York, 1947.

Malkiel, Yakov. “Studies in Irreversible Binomials.” *Lingua* 8 (1959), 113-160.

Millett, Bella. “The Saint's Lives of the Katherine Group and the Alliterative Tradition.” *Journal of English and Germanic Philology* 87 (1988), 16-34.

—. *Medieval English Prose for Women: Selections from the Katherine Group and Ancrene Wisse*. Oxford: Clarendon Press, 1990.

Nakao, Yoshiyuki and Midori Matsutani. “Descriptive

- Notes on Paired Words in the Language of Chaucer's Own Prose." *Bulletin of the Faculty of Education, Yamaguchi University*. Vol. XLVI, Pt. 1. (1996), 83-111.
- Oakden, J.P. *Alliterative Poetry in Middle English: The Dialectal and Metrical Survey*. 2 Vols. 1930, 1935. Rpt. in one vol. N.P.: Archon Books, 1968.
- Roberts, Jane and Christian Kay. "A Thesaurus of Old English: Information about the Thesaurus." *Dictionaries of Medieval Germanic Languages: A Survey of Current Lexicographical Projects. Selected Proceedings of the International Medieval Congress University of Leeds, 4-7 July 1994*. Eds. van Dalen-Oskam, K.H., K.A.C. Depuydt, W.J.J. Pijnenburg and T.H. Schoonheim. Turnhout (Belgium): Brepols, 1997. 31-40.
- Roberts, Jane and Louise Sylvester. "A Thesaurus of Middle English: Information about the Thesaurus." *Dictionaries of Medieval Germanic Languages: A Survey of Current Lexicographical Projects. Selected Proceedings of the International Medieval Congress University of Leeds, 4-7 July 1994*. Eds. van Dalen-Oskam, K.H., K.A.C. Depuydt, W.J.J. Pijnenburg and T.H. Schoonheim. Turnhout (Belgium): Brepols, 1997. 41-45.
- Roberts, Jane and Irené Wotherspoon. "Historical Thesaurus of English: Information about the Thesaurus." *Dictionaries of Medieval Germanic Languages: A Survey of Current Lexicographical Projects. Selected Proceedings of the International Medieval Congress University of Leeds, 4-7 July 1994*. Eds. van Dalen-Oskam, K.H., K.A.C. Depuydt, W.J.J. Pijnenburg and T.H. Schoonheim. Turnhout (Belgium): Brepols, 1997. 47-54.
- Schaefer, Ursula. "Twin Collocations in the Early Middle English Lives of the Katherine Group." *Orality and Literacy in Early Middle English*. Ed. Herbert Pilch. Tübingen: Narr, 1996. 179-198.
- Shinoda, Yoshihiro. "Double Verb Phrases in *Saint Juliana and Hali Meidhad*." *Language and Style in English Literature: Essays in Honour of Michio Masui*. Ed. Michio Kawai. Tokyo: The Eichosha Ltd, 1991. 191-210.
- Shimogasa, Tokuji. "Binomial Expressions in the Romance of Guy of Warwick." *Yamaguchi Joshidaigaku Bungakubu Kiyō* (1992), 83-106.
- Sylvester, Louise and Jane Roberts. *Middle English Word Studies: A Word and Author Index*. Cambridge: D.S. Brewer. 2000.
- Taylor, Paul Beekman. "The Old English Poetic Vocabulary of Beauty." *New Readings on Women in Old English Literature*. Eds. Damico, Helen and Alexandra Hennessey Olsen. Bloomington; Indianapolis: Indiana Univ Pr, 1990. 211-221.
- Watanabe, Hideki. "Douigo-Heiretsu Kobun no Keifu [Lineage of Synonymous Word Pairs in English]." (in Japanese) *The Rising Generation*. Vol. CXL. No.6 (1994), 285-287.
- . "A Thesaurus of Old English Revisited." *Lexicographica. Series Maior*. Tübingen: Max Niemeyer, forthcoming.
- Wyld, Henry Cecil. "Studies in the Diction of Layamon's *Brut*." *Language* 6 (1930), 1-24; 9 (1933), 47-71, 171-91; 10 (1934), 149-201; 13 (1937), 29-59, 194-237.
- Yonekura, Hiroshi. "Some Notes on the Doublets in the Wycliffite Bible." *Studies in Linguistic Change in Honour of Kazuo Araki*. Eds. Nakano, Hirozo, Kenji Kondo & Hidetoshi Iida. Tokyo: Kenkyusha, 1972.